

Wordsworth の牧歌・Crabbe の牧歌

水野 真理

英国における牧歌の流れを考えると注目する事象の一つに、十八世紀後半から十九世紀初頭にかけて詩人たちの眼が田園の現実に対して開かれていったということがあげられる。牧歌は紀元前のギリシアに起源し、近代では英国において最大の隆盛を見た。そして十八世紀に至るまで、牧歌に描かれた田園世界は、¹⁾ 文明社会の複雑さから解放された観想的、または享樂的な生の隠喩として機能してきたのであり、現実の田園の忠実な模倣を旨とするものではなかった。そこからは貴族趣味の色濃い装飾的な牧歌も生み出されたのである。

こういった虚構としての牧歌世界を謳う伝統に反発した詩人として、ウィリアム・ワーズワース (1770-1850) とジョージ・クラップ (Crabbe) の二人をあげることができる。二人の作品の登場人物は、歌や笛を奏しんだり恋にやつれたりする伝統的な牧歌の牧人と異なり、実際に労働し生活する者たちである。しかし現実をどのように謳うかという点になるとワーズワースとクラップには相違があり、その相違を考察することで、二人の生きた時代の多様性を浮かび上がらせよう、というのが本発表のねらいである。ワーズワースの牧歌「マイケル」(1800) は詩人が暮らした湖水地方で採録した話、という想定で書かれる。その語りは、表題の主人公の牧人を「気丈で手足も健やかな老人」「身体は若い頃から老年の今に至るまで人なみ以上に強く」云々と紹介するところ

から始まる。詩歌と恋愛をこととする旧来の牧歌の軟弱な牧人とは対照的に、マイケルが働く牧人であることが強調されているのである。さらに、マイケルとその妻、息子の三人の素朴な団欒の光景が美しく描かれる。結末では、都会へ出た息子の墮落によって不幸に陥いるマイケルに対して村人全員が憐れみを忘れなかった、と書き添えられている。しかしこれは現実の羊飼の暮らしと呼ぶには、美しすぎはしないか。虚構としての牧歌世界に反発しながらも、やはりワーズワースは田園世界への美しい思い入れ——労働に勤しむ健康で素朴で思いやり深い人々の住まう田園という幻想——を持っているように思われる。自伝的長編詩『序曲』(1800) の中でワーズワースは、自分の書く牧歌について語り、彼以前の牧歌を「ただの夢」「軽薄な洗練」と断じ、それにひきかえ、厳しく質素な現実の牧人の生活にこそ自分は美を見出す、という旨を述べている。現実的でなければならぬ、しかし同時に美を感じさせるものでなければならぬ、というのがもしワーズワースにとって詩の条件であるとすれば、彼が「マイケル」において、生活人としての牧人を描きながら、そこに美しい構図を思い入れずにはすまなかったということも理解できる。

ワーズワースの同時代人クラップも十八世紀までの牧歌の虚構性・装飾性に反発したが、現実に対してはワーズワースよりさらに徹底した忠実さを守っている。故郷の田舎町に題材を得た詩集『村』(1800) の中で、彼は、労働は健康につながる、従って農民は健康である、といった紋切型の田園観を批判し、苛酷な条件下の労働者として農民をとらえている。それはワーズワースがマイケルについて身体の頑健さを強調するのは著しい対象をなす。ワーズワースが憐れみに満ちた隣人を描くとすれば、クラップは

無関心と利己主義を決めこむしかな隣人を描く。クラップはワーズワースに見られるようなロマンティックな田園の理想化を厳しく拒むのだ。後年の詩集『町』(1810)においてもクラップの姿勢は変わっていない。

さらにもう一步進んでクラップは過激とも言えるやり方で「詩」そのものを否定している。『村』の中で彼は、自分は詩人の方法でなく「真実」の方法で事物を描く、とか、詩人には飢えた者を慰める力がない、とか述べている。またジョンソン博士(Johnston)が手を入れて、「(詩人は)真実と自然から離れて、想像力の導くところへでなく、ヴァージルの導くところへ(行くべきでない)」とした部分は、初稿では「真実と自然から離れて想像力やヴァージルの導くところへ(行くべきでない)」となっており、クラップ自身は想像力さえも有害視していたことがわかる。

ワーズワースより十六年も年長のクラップがこのような急進的な姿勢を標榜することに我々は一瞬とまどいを覚える。しかし、クラップは、その勇ましい声とは裏腹に、微妙な立場に立っている。

『村』の就筆当時、彼はラントランド公爵の館ビヴァー(Batavia)城付の牧師であった。十七、十八世紀、地主は囲い込みによる大土地所有と農民の労働を経済基盤としながら、あたかもそういう事実が存在せぬかのよう風景を築きしめる庭園(風景庭園)をそなえた館を競って造ったのである。「良き眺め」を意味するこの城の名前がそれを象徴している。そこに庇護されていたという事実は、クラップの義憤に対する最大のアイロニーであろう。また

彼は「詩」を否定しながら詩人であり続け、しかも殆んど常に、十八世紀の詩型の主流をなす二行連句を用いて書き続けた。この韻律で謳われるとき、クラップの詩は限りなくオーガスタン時代の諷刺詩に近いものに響く。卑小さも含めて人間の本性への鋭い指摘がクラップの正義感から出ているとしても、そこにアレグザンダー・ポープの伝統を無視することは難しい。このように、十八世紀に抜けがたくとらわれながら、ヒューマニスティックな理想を、詩を、想像力を否定しようとするとき、詩人としてクラップは袋小路にはいりこんでしまったと言えるのではないか。

ここで再びワーズワースが「マイケル」と『序曲』に示した、現実への眼差と美しい思い入れの両面性が想起されてもよいだろう。思い入れは、言葉を換えれば想像力——真実と自然から詩人を引き離すとしてクラップが有害視した想像力——と呼ぶことができよう。『序曲』の中のある箇所です。ワーズワースは、牧人の中に「王侯のごときもの」「一種の神性」「霧の中を闊歩する巨人」「空にそびえる十字架」を見てとるという啓示的な体験を語っている。一介の羊飼にそのような超絶的な役割を負わせることは確かに大げさにすぎようが、それが良かれ悪しかれ、ロマンティズムの想像力の幸福な自由さであるように思われる。

牧歌がクラップとともに一つの終焉を迎えようとしていた一方で、同時代のワーズワースがそれをロマンティシズムへとこのびやかに開きつつあったということが、この時代の面白さの一つではないだろうか。